

世界一長い木造農道橋—蓬萊橋—

—静岡県島田市—

道後平野土地改良区 近 田 昌 樹

1. はじめに

表紙写真は、静岡県島田市の大井川に架かる「蓬萊橋」である。

大井川は、江戸時代東海道の「箱根8里は馬でも越すが、越すに越されぬ」川であり、江戸時代には架橋も渡船も禁止され、人足による渡しだけであった。

東側の大井川左岸が、東海道53次の23番目の島田宿で、西側は24番目の金谷宿である。渡し賃は、現在価で1,440～2,820円といわれ、川が増水し水深4尺（約120cm）になると「川留め」になり、「川留め」は通常1回2～7日間で、年間50日、多いときには数百人から千人超が足止めを食い、旅人が長期間滞在することから、両宿とも賑わったという¹⁾。

この東海道の難所は明治時代になると、明治政府によって渡船や架橋が許可され、大井川大橋が明治9（1876）年に仮橋、同16（1883）年には全長1,225mの木橋が、その後昭和3（1928）年に鉄橋²⁾となり、国道1号線として整備される。

2. 蓬萊橋の現況

蓬萊橋は、全長897.4m、全幅2.7m、通行幅（有効幅員）2.4mの木造橋である。JR島田駅から南東に約1.3kmの地点にあり、駅から徒歩で15分程度である。

蓬萊橋は、島田市を代表する観光スポットで、国内でも数少ない賃取（有料歩道）橋であるが、平成9

（1997）年12月30日に「世界一の長さを誇る木造歩道橋」としてギネスに認定されている。「長い木＝長生きの橋、全長897.4m（やくなし＝厄無し）」の語呂合わせで縁起のいい橋として人気があるという³⁾。橋の中ほどからは富士山が見えるというが、残念ながら平成26（2014）年3月の往訪時には富士山を見られなかった。

橋の左岸、島田市街側には、番小屋があり、17時までは管理者「蓬萊橋土地改良区」の橋番が常駐しており、直接通行料を支払うが、時間外は料金箱に入れるようになっている。大人・自転車100円、小学生以下10円で、原付自転車以上は通行禁止である。

親柱には、「蓬萊橋」と「明治拾貳年架橋」の名がある。橋の袂には、屋根付きの看板、立札がある。屋根付きの看板の一つは、「強風のため、通行注意、蓬萊橋土地改良区」と大きく掲げ、もう一つには「通行について（お願い）この橋は木造橋であり、随時敷板を修繕しておりますが、通行する際には、足元に十分注意してお降り下さい。禁煙 蓬萊橋土地改良区」とある。

土地改良区が管理する有料の農道橋であるが、100円は安い。管理料も出ないであろう。ちなみに開通時（明治12（1879）年）は、関係者無料、その他の者からは5厘を徴収、平成6（1994）年は大人20円、自転車30円、リヤカー30円であった^{5), 6)}。

3. 橋の構造

表紙写真には下部の橋脚が写っているが、高水敷き部分は木製被覆、流路部分の低水部はコンクリートパ



写真-1 大井川左岸からの蓬萊橋（右に屋根付き看板、車止めには通行料の案内札がある。）



写真-2 橋の構造（床板と桁木）



写真-3 蓬莱橋の大きさ（身長170cmを参考に）

イルで支間約10mである。上部構造はすべて木製で桁木φ25cm、床板厚6cm、夜間照明として、平成15（2003）年に720個のソーラーブリックが取り付けられている。構造の詳細については、松原氏の文献⁷⁾に詳細写真や構造図が添付されているので参照にされた。

高欄は木製で高さ50cmと低く、橋上は河床から7mあり、幅員も狭く、徒歩で歩くにしても危なさを感じる。

そのためか、観光ガイドでも子供連れよりカップルや友達旅行の評価が高い⁸⁾。真冬のような寒さで強風の中、若いカップルが手を繋いで橋を渡って来たので「どうでしたか」と感想を聞くと、「寒かった。でもよかったですよ」と答えが返ってきた。

4. 橋の歴史

(1) 牧の原台地の開墾 島田市街から橋を渡ると牧之原（金谷之原）台地になる。茶所静岡県でも屈指の茶園地帯で現在約5,000haの面積であるが、蓬莱橋は牧之原台地の茶園開発に伴い架けられたという。

明治元（1868）年に15代将軍徳川慶喜が大政奉還後身を寄せたのが駿府（静岡市）徳川藩であり、慶喜を駿府まで警護してきた「新番組」が版籍奉還により解散し、禄を失う。隊長の中條景昭らが、牧の原台地に注目して勝安芳（海舟）等がいた静岡藩に入植を願い出た。新政府が茶の輸出を振興するなか、静岡藩としても茶に殖産の活路を求めていることから、「開墾方」に改組し約1,425haの開墾が命じられ明治2（1869）年に入植する。新番組から200戸余り、翌年には元彰義隊ほか84戸が加わり、300戸余りの入植者である。

また、大井川川越制度が明治3（1870）年に廃止され、人足の廃業に伴う救済策として開墾事業が実施され、100戸の人足が3組に分かれ入植している。

明治11（1878）年には、開墾方で200ha、人足など

で41haの茶園が開墾されている。しかし、明治11年に215名いた士族は、開墾などの重労働、衣食住の調達に加え、開墾手当の廃止、茶の価格の低下などにより、5年後には約118名に半減しその後も離散していく。そのなか、中條は、明治4（1871）年に神奈川県令の内示を受けるも牧之原に残り終生開拓に情熱を注いだという。離散した人の土地を地元の農家や村々が買い取り、製茶技術も生み出し今日みられる大茶園になった⁹⁾。

(2) 蓬莱橋の由来 その明治11年10月に、島田宿の開墾人総代が中心となり42名で島田宿対岸の初倉地区の開墾をするため、「農業一途使用仮橋架橋嘆願書」を静岡県に提出、翌年に「蓬莱橋仲間出資組合」を設立して、島田市の農民の共同出資により橋は完成した¹⁰⁾。

蓬莱橋の名の由来は、明治3年静岡藩主が中條の住居地である右岸の矢口原地域を視察後、中條に大井川左岸で「農は里の宝 向こうの山は宝の山 みなで力をあわせ 宝の山を切り開けよ」と激励したことがあり、町内の識者が「藩侯が矢口原を宝の山とおっしゃったことがある。それに因んで『蓬莱橋（ほうらいばし）』にしたらどうか」という案で、明治12（1879）年1月12日付けで正式に誕生したとのことである³⁾。

ただ、「蓬莱」は不老不死の霊薬がある山であり、理想郷を意味し、富士山を指すともいわれる。永遠になくならない地、富士見橋という解釈も一興であるが。



写真-4 蓬莱橋上からの島田市街（高欄下にソーラーブリックが見える。）

(3) 橋の管理 完成後は、度重なる被災や落橋により付替え不能になり「出資組合」は解散し、その後「蓬莱橋利用組合」が結成され管理してきた。昭和40（1965）年の災害復旧事業を機会に「蓬莱橋土地改良区」が設立され、管理運営は土地改良区が行っている。敷板や看板設置などは渡橋料金などでまかない、改修

工事については島田市が行う。通常維持管理費に年間3,000万円の費用がかかっているという¹⁰⁾。

5. おわりに

島田市のホームページには、蓬萊橋から川渡し、東海道跡を周回する20.7km、所要5時間の観光ウォーキングが提案され、5月には「蓬萊橋ぼんぼり祭り」、9月には「蓬萊橋観月祭」が開催されている。今後も、長い木橋の農道が保存活用されることを願い紹介を終わりたい。

引用・参考文献

- 1) 国土交通省：道の歴史 IV 近代の道, <http://www.mlit.go.jp/road/michi-re/> (参照 2015 年 12 月)
- 2) ふじのくに文化資源データベース：大井川橋, <http://www.fujinokunibunkashigen.net/resouce/main.php?search=area&mode=detail&article=1777> (参照 2015 年 12 月)
- 3) 島田市：蓬萊橋, <http://www.city.shimada.shizuoka.jp/kairyo/hourabasi.html> (参照 2015 年 12 月)
- 4) 宮内章好：6 蓬萊橋, 日本の近代遺産 50 選, 日本経済新聞 2008 年 6 月 12 日夕刊, <http://www.adnet.jp/nikkei/kindai/06/> (参照 2015 年 12 月)
- 5) 静岡県：中部地域施設の概要 蓬萊橋, <http://www.pref.shizuoka.jp/kensetsu/ke-620/rekishiteki/chubu/page/page15.html> (参照 2015 年 12 月)
- 6) 清水太郎：歴史探訪 33, 文苑 2008 年 10 月, <http://www.mokuzai-tonya.jp/05bunen/zuisou/2008/tanbou/10.html> (参照 2015 年 12 月)
- 7) 松原企画設計事務所：木の構造物 蓬萊 (ほうらい) 橋, <http://www.kinomise.com/ki/hourai/hourai.html> (参照 2015 年 12 月)
- 8) じゃらん net：蓬萊橋, http://www.jalan.net/kankou/spt_22209ae2190022906/ (参照 2015 年 12 月)
- 9) 静岡県立中央図書館：静岡移住後の徳川家の家臣と士族授産, 資料に学ぶ静岡県の歴史, pp.94~95, <http://www.tosyokan.pref.shizuoka.jp/data/open/cnt/3/50/1/ssr442.pdf> (参照 2015 年 12 月)
- 10) 佐々木博昭：大井川, http://www.geocities.jp/general_sasaki/oigawa-ni.html (参照 2015 年 12 月)

お知らせ

公開シンポジウム「食料は足りるのか」の開催について

人新世 (Anthropocene) は、とくに 1950 年代から始まった人間活動の一大加速とも呼ぶべき状況の表れである。人口が 1800 年代初めに 10 億人に達するのに、およそ 20 万年を要したが、現在では 70 億人を超えている。国連・社会経済局の最近の発表によれば、さらに「世界人口は今後 15 年で約 10 億人増え、2030 年までに約 85 億人に達する。2050 年までには約 97 億人、2100 年ごろには約 112 億人に膨張する」と予測されている。この数字の可否は別にしても、世界の人口扶養力を分析して示すことは、日本の食料地政学的位置づけ、さらには日本の農政の一指針ともなりえよう。

本シンポジウムでは「世界の食料需給」を概括的に展望し、引き続き農業における主要な生産要因である「気候変動による水文学的影响」「土壌資源」「諸生産要因の動向と食料生産力」などをめぐって現状を分析し、科学・技術的展望を示す。また、動物性タンパクの重要な供給源である「漁業資源」をめぐって、その資源量の現状を分析し、国際的資源管理の展望を示す。

1. 主催 (公財) 農学会, 日本農学アカデミー
後援 東京大学大学院農学生命科学研究科, 毎日新聞社, ワールドウォッチジャパン
2. 日時 平成 28 年 3 月 12 日 (土) 13:00~17:30
3. 場所 東京大学農学部 弥生講堂一条ホール
(東京都文京区弥生 1-1-1)

4. プログラム

総合司会 (公財) 農学会常務理事 丹下 健
開会挨拶 (公財) 農学会会長 長澤寛道
「世界の食料問題と日本のポジション」

名古屋大学大学院生命農学研究科教授 生源寺真一
「水と気候変動と食料生産」

東京大学生産技術研究所教授 沖 大幹
「人間と土壌」 東京大学名誉教授 宮崎 毅
「魚が獲れなくなることは、『大問題』か?」

東京大学大学院農学生命科学研究科教授 黒倉 壽
「100 億人を扶養するための食料生産：挑戦と課題」

国際農林水産業研究センター理事長 岩永 勝
パネルディスカッション

司会：東京大学大学院農学生命科学研究科教授 中嶋康博
閉会挨拶 日本農学アカデミー会長 古在豊樹

5. 参加費 無料 (先着 300 名)

6. 申込み・問合せ先

(公財) 農学会事務局
〒113-8657 東京都文京区弥生 1-1-1 東京大学農学部内
E-mail: zaidan@nougakkai.or.jp
TEL: 03-5842-2210 FAX: 03-5842-2237
URL: <http://www.nougaku.jp/>